大学生の英語学習と社会的比較・継時的比較

徳岡　大・前田健一

The relations of social comparison and temporal comparison to English learning in university students

Masaru Tokuoka and Kenichi Maeda

本研究は，大学生の学業場面における社会的比較と継時的比較の個人差を測定する尺度を作成し，構成概念妥当性，英語の成績や英語の授業に対する自己効力感との関連を検討した。その結果，学業場面における社会的比較は，他者遂行比較，他者思考比較，他者方法比較，他者失敗比較および他者態度比較の 5 因子構造であった。学業場面における継時的比較は，自己内学習比較と自己内遂行比較の 2 因子構造であった。学業場面における社会的比較尺度と継時的比較尺度はどちらも一定の構成概念妥当性が認められた。自己効力感の高群と低群で比較した結果，自己効力感の高群では，低群よりも他者遂行比較，他者思考比較，他者失敗比較，他者態度比較および自己内学習比較が有意に多かった。また，英語の成績の高群では，低群よりも他者遂行比較，他者思考比較，他者態度比較，自己内学習比較および自己内遂行比較が有意に多かった。これらの結果から，学業場面における社会的比較と継時的比較の有効性が示唆された。

キーワード：社会的比較，継時的比較，自己効力感

問題

社会的比較は，他者との比較を通じて自己についての情報を集める傾向として定義され（Festinger, 1954; Gibbons & Buunk, 1999），学校教育の中でよくみられる活動である。例えば，入試選抜，能力別学級編成，相対的な成績評価などのシステムでは，社会的比較が促進される（Ames, 1992; Darnon, Dompnier, Gilliéron, & Butera, 2010）。また，外山（2009）によると，中学生では，自分よりも優れた成績を示す他者と比較する上方比較を行う生徒が，全体の 80.2%を占めるという。このように社会的比較は，日常の学校教育の中でよく見られる一般的な行為である。

学業場面における社会的比較の先行研究では，自分と比べて他者の成績を良いと思うか悪いと思うかの主観的評価，あるいは自分と他者の実際のテスト成績などを社会的比較の指標として用いることが多かった（Blanton, Buunk, Gibbons, & Kuyper, 1999; Huguet, Dumas, Monteil, & Genestoux, 2001;

外山, 2006b)。しかし，社会的比較過程理論（Festinger, 1954）によると，社会的比較には能力や学業成績の比較だけでなく，意見などの比較も含まれる。例えば，社会的比較をしやすい傾向の個人差を測定する社会的比較志向性尺度も，能力比較と意見比較から構成されている（Gibbons & Buunk, 1999）。

外山（2007）は，中学生を対象に学業場面の社会的比較の個人差を測定する尺度を開発した。この尺度は，学業的遂行の結果を比較すること（遂行比較）だけでなく，学習方法や学習時間などを比較すること（学習比較）から構成された。中学生の国語と数学の学業成績に及ぼす遂行比較と学習比較の影響を検討した結果，遂行比較は数学の学業成績と関連し，学習比較は国語の成績と関連することを見出している（外山, 2007）。

外山（2007）の遂行比較や学習比較は，中学生の学業成績と密接な関係を示したが，この尺度をそのまま大学生に適用することはできない。例えば，遂行比較には「テストの順位を比べる」という項目があるが，大学ではテストの点数や順位を学生にフィードバックすることが少ないので，他者とテストの点数や順位を比べることができない。また，学習比較には「宿題のできぐあいを比べる」という項目があるが，大学で宿題を課す授業はあまり多くないので，大学生一般には適さない項目である。そこで，本研究では，外山（2007）を参考にしながら，大学生に適した遂行比較と学習比較の質問項目を新たに作成することにした。

ところで社会的比較は，能力や意見などを他者と比較することに焦点を当てている。しかし，比較の中には，他者との比較だけでなく，過去の自分と比較するような継時的比較（Albert, 1977）もある。しかし，継時的比較に関する研究は，社会的比較に関する研究に比べて少ないのが現状である（並川, 2011）。特に，大学生の継時的比較を測定する尺度は，現在，並川（2011）だけである。しかし，この尺度は，能力に関する継時的比較の 1 因子で構成されており（並川，2011），学習方法や学習時間などの継時的比較を捉えていない。そこで本研究では，社会的比較だけでなく，継時的比較についても大学生に適用できる尺度を新たに作成することにした。

吉川・久保（1991）は，成功場面と失敗場面を提示し，社会的比較と継時的比較のどちらが生起しやすいかを実験的に検討した。その結果，成功場面では，継時的比較が社会的比較よりも多く生起することが示された。この結果を学業場面に適用すると，学業成績のよい学生は，これまで多くの学業的成功体験をし，そのつど継時的比較を繰り返しているので，継時的比較をする傾向が強くなっていると考えられる。

本研究の目的は，次の 2 点を検討することである。第 1 に，大学生の学業場面における社会的比較と継時的比較の個人差を測定する尺度を作成し，構成概念妥当性を検討することである。第 2 に，学業場面における社会的比較や継時的比較と学業成績や自己効力感との関連を検討することである。

なお本研究では，大学生の学業場面として英語の学習場面を取り上げる。英語の学習場面を用いる理由は以下の通りである。本研究の調査を実施した大学では，1，2 年生に対し TOEIC の受験を義務づけており，語学系の授業の成績には TOEIC の点数が反映されるようになっている。各授業の最終的な評価だけでなく，TOEIC の点数がフィードバックされることによって，具体的な社会的比較や継時的比較が行われやすくなると考えたからである。

予備調査

目的

予備調査では，大学生の学業場面における社会的比較と継時的比較の個人差を測定する尺度を作成し，大学生の学業場面における社会的比較と継時的比較の因子構造を明らかにすることを目的とする。

方法

項目の収集と尺度作成　大学生における学業場面の社会的比較と継時的比較をできるだけ多面的に測定するため，外山（2007）を参考にして，ボトムアップ的に社会的比較と継時的比較を収集した。大学生，大学院生および専門学校の学生計 83 名（平均年齢 20.72 歳; 男性 18 名，女性 65 名）を対象に，学習に関連する場面を想起させ，これまでに他者とどのような比較をしたことがあるか（学業場面における社会的比較），過去の自分と今の自分に関してどのような比較をしたことがあるか（学業場面における継時的比較）について自由記述で回答を求めた。

その結果，学業場面における社会的比較については，231 事例が収集された。収集された 231 事例から記述内容が完全に重複する事例を 1 種類の項目としてまとめた。その結果，最終的に 119 種類の項目が収集された。これら 119 項目について第 1 著者と心理学を専攻する大学院生 1 名により意味内容が類似している事例をまとめた結果，5 カテゴリーに集約された。カテゴリーの信頼性を検討するため，心理学を専門とする大学教員 1 名が 119 項目をカテゴリーの特徴を基に 5 カテゴリーに分類し，一致率を検討した。その結果，κ 係数は .86 となり，十分な信頼性が得られた。5 つのカテゴリーを代表する事例を 4 事例ずつ抽出し，合計 20 項目からなる学業場面における社会的比較尺度を作成した。

学業場面における継時的比較については，149 事例が収集された。収集された 149 事例から記述内容が完全に重複する事例を 1 種類の項目としてまとめた。その結果，最終的に 113 項目が収集された。これら 113 項目について，第 1 著者と心理学を専攻する大学院生 1 名により意味内容が類似している項目をまとめた結果，6 カテゴリーに集約された。心理学を専門とする大学教員 1 名が 113 項目をカテゴリーの特徴に基づいて，6 カテゴリーに分類し，一致率を検討した。その結果，κ 係数は .84 となり，十分な信頼性が得られた。6 つのカテゴリーを代表する事例を 2〜4 事例ずつ抽出し，合計 21 項目からなる学業場面における継時的比較尺度を作成した。

対象者　大学生および専門学校の学生 302 名（平均年齢 19.68 歳, $SD = 0.87$; 男性 109 名，女性 188 名，不明 5 名）を分析対象とした。

手続き　大学や専門学校の講義時間を利用して集団で調査を実施した。回答はすべて，7 段階評定法（1: 比較しない, 3: 少し比較する, 5：まあまあ比較する, 7: よく比較する）で求めた。

調査時期　平成 23 年 11 月と 12 月に実施した。

調査内容　学業場面における社会的比較尺度 20 項目と学業場面における継時的比較尺度 21 項目を実施した。学業場面における社会的比較尺度の教示は，「英語を学ぶ時，1〜20 の項目についてあなたは他者とどの程度比較しますか。1〜7 のもっともあてはまると思う数字を 1 つ選んで，その数

字に○をつけてください。」であった。また，学業場面における継時的比較尺度の教示は，「英語を学ぶ時，1〜21 の項目についてあなたは現在の自分と過去の自分をどの程度比較しますか。1〜7 のもっともあてはまると思う数字を 1 つ選んで，その数字に○をつけてください。」であった。

結果と考察

学業場面における社会的比較尺度の因子分析結果　学業場面における社会的比較尺度 20 項目について因子分析（主因子法, Promax 回転）を行った。固有値の減衰状況（8.36, 2.00, 1.91, 1.38, 1.11, 0.82,･･･）および因子の解釈可能性から 5 因子が抽出された。因子負荷量が，.40 未満を示した 1 項目および複数の因子に .30 以上を示した 2 項目を分析から除外した。残りの 17 項目について再度因子分析（主因子法, Promax 回転）を行った。最終的な因子分析結果を Table 1 に示す。2 項目のみで構成される因子が 2 つあったが，因子分析で得られた 5 因子は，尺度作成段階で想定した 5 カテゴリーと完全に一致したため，5 因子を採用した。学業場面における社会的比較は，中学生を対象にした外山（2007）の 2 因子構造と異なる 5 因子構造を示した。このことから，学業場面における大学生の社会的比較は，中学生の社会的比較よりも分化して捉えられていることが示唆される。

5 つの因子の命名は次の通りである。第 1 因子は，他者と遂行能力や成績を比較する項目から構成されるので，他者遂行比較（$\alpha = .89$）と命名した。第 2 因子は，他者と着眼点や発想などの思考を比較する項目から構成されるので，他者思考比較と命名した（$\alpha = .90$）。第 3 因子は，他者とノートの取り方や勉強の仕方などの学習方法を比較する項目から構成されるので，他者方法比較と命名した（$\alpha = .88$）。第 4 因子は，他者とつまずきや間違いを比較する項目から構成されるので，他者失敗比較と命名した（$\alpha = .85$）。第 5 因子は，他者と学習意欲や学習態度を比較する項目から構成されるので，他者態度比較と命名した（$\alpha = .83$）。

学業場面における継時的比較尺度の因子分析結果　学業場面における継時的比較尺度 21 項目について因子分析（主因子法, Promax 回転）を行った。固有値の減衰状況（9.49, 1.89, 1.34, 1.04, 0.99, …）および因子の解釈可能性から 2 因子が抽出された。固有値の減衰状況からは，3 因子や 4 因子の可能性も考えられたが，3 因子や 4 因子では尺度作成段階で想定した 6 カテゴリーが混在したため，2 因子を採用した。因子負荷量が，.40 未満を示した 1 項目および複数の因子に .30 以上を示した 1 項目を分析から除外した。残りの 19 項目について再度因子分析（主因子法, Promax 回転）を行った。最終的な因子分析結果を Table 2 に示す。

2 つの因子の命名は次の通りである。第 1 因子は，学習意欲や頭の使い方など学習過程の継時的比較をする項目から構成されたので，自己内学習比較（$\alpha = .93$）と命名した。第 2 因子は，成績や理解度などを継時的比較する項目から構成されたので，自己内遂行比較と命名した（$\alpha = .84$）。学業場面における継時的比較は，2 因子構造を示し，並川（2011）の継時的比較志向性尺度により測定される能力比較以外の継時的比較の要素が抽出された。

Table 1
学業場面における社会的比較尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5
学力	**.99**	-.18	.01	.02	-.02
成績	**.87**	-.15	.10	.02	-.10
知識の量	**.79**	.15	-.05	-.09	.12
学習したことを覚えるはやさ	**.58**	.25	-.05	-.02	.05
学習したことの暗記量	**.55**	.19	-.04	.14	.01
疑問を持つ着眼点	-.04	**.91**	.04	-.06	-.08
発想	-.06	**.88**	-.02	.02	.02
論理的な展開の仕方	.05	**.87**	-.02	-.05	-.01
ものの考え方	-.06	**.69**	.05	.15	.05
ノートの取り方	-.05	-.11	**.99**	-.04	.02
勉強の仕方	-.02	.02	**.75**	.09	.01
講義内容のまとめ方	.10	.17	**.68**	-.03	-.04
レポートの書き方	.07	.09	**.66**	-.01	.04
つまずくポイント	-.03	.01	.01	**.94**	-.01
間違えている箇所	.07	.00	-.01	**.75**	.01
学習に対するやる気の出し方	-.04	-.04	.04	-.02	**.97**
学習態度	.03	.00	-.01	.03	**.73**
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F1	-	.52	.51	.52	.47
F2		-	.54	.58	.59
F3			-	.51	.52
F4				-	.46

Table 2
学業場面における継時的比較尺度
の因子分析結果

	F1	F2
授業態度	**.88**	-.22
学習理由	**.78**	-.22
学習に対するやる気	**.74**	.05
学習態度	**.72**	-.02
頭の使い方	**.68**	.10
学習方法	**.68**	.14
ノートのまとめ方	**.64**	.00
考え方	**.63**	.15
学習環境	**.59**	.06
勉強量	**.55**	.29
勉強時間	**.52**	.24
成績の目標	**.52**	.19
学習で困難を感じること	**.48**	.20
成績	-.24	**.94**
問題に対する正解率	-.15	**.88**
理解度	.18	**.62**
知識の量	.20	**.59**
記憶力	.23	**.54**
TOIECの点数	.03	**.44**
因子間相関	F1	F2
F1	-	.69

本調査

目的

予備調査で作成した学業場面における社会的比較尺度と継時的比較尺度の構成概念妥当性について，社会的比較志向性および継時的比較志向性との関連から検討する。また，英語の授業に対する自己効力感や英語のテスト成績の高低によって，これら2つの尺度に相違がみられるか否かを分析し，社会的比較や継時的比較と自己効力感やテスト成績との関連を検討する。

方法

調査対象者　広島県内の大学において現在，英語の授業を受講している大学生に以下の調査を実施した。欠損値のなかった142名（平均年齢19.75歳, $SD = 0.75$; 男性69名，女性69名，不明4名）を分析対象とした。

調査内容　1）学業場面における社会的比較尺度：予備調査で作成した学業場面における社会的比較尺度17項目を使用した。この尺度は，他者遂行比較，他者思考比較，他者方法比較，他者失敗比較および他者態度比較の5因子から構成される。英語を学習する際に他者とどの程度比較するかについて，7段階評定法（1: 比較しない, 3: 少し比較する, 5：まあまあ比較する, 7: よく比較する）で回答を求めた。

2）学業場面における継時的比較尺度：予備調査で作成された学業場面における継時的比較尺度19項目を使用した。この尺度は，自己内学習比較と自己内遂行比較の2因子から構成される。英語を学習する際に過去の自分と今の自分をどの程度比較するかについて，7段階評定法（1: 比較しない, 3: 少し比較する, 5：まあまあ比較する, 7: よく比較する）で回答を求めた。

3）社会的比較志向性尺度：Gibbons & Buunk（1999）によって作成された社会的比較志向性尺度を，外山（2002）が翻訳した11項目を使用した。この尺度は，得点が高いほど，社会的比較志向性が高いことを示す。各項目の内容が，普段の自分にどの程度あてはまると思うかについて，7段階評定法（1: あてはまらない, 3: 少しあてはまる, 5: まあまああてはまる, 7: とてもあてはまる）で回答を求めた。

4）継時的比較志向性尺度：並川（2011）によって作成された継時的比較志向性尺度11項目を使用した。この尺度は，得点が高いほど，継時的比較志向性が高いことを示す。各項目の内容が，普段の自分にどの程度あてはまると思うかについて，7段階評定法（1: あてはまらない, 3: 少しあてはまる, 5: まあまああてはまる, 7: とてもあてはまる）で回答を求めた。

5）自己効力感尺度：Pintrich & DeGroot（1990）の学習動機づけ方略尺度（Motivated Strategies for Learning Questionnaire: MSLQ）のうち自己効力感を測定する9項目を，森（2004）が英語の授業に対する自己効力感を測定するように翻訳修正したものを使用した。この自己効力感尺度ついては，得点の高い大学生が低い大学生よりも，推測を用いて内容を理解しようとする推測方略，学習内容を確認するため深く考える熟慮方略，および英語の基本的知識を身につけるための作業方略を多く使用することが明らかとなっている（森，2004）。なお，久保（1999）によると，これらの方略使用と英語のテスト成績は正の関連を示すことが報告されている。この9項目の回答にあたり，現在履

修している英語の授業を想起させ，各項目の内容についてそう思う程度を 7 段階評定法（1: あてはまらない, 3: 少しあてはまる, 5: まあまああてはまる, 7: とてもあてはまる）で回答を求めた。

6）英語のテスト成績：前回受けた TOEIC 得点について，自己報告させた。200 点以下を 1，900 点以上を 16，その間を 50 点間隔で区切った選択肢 16 の中から（e.g., 6: 401～450 点），該当する番号を回答させた。

結果と考察

下位尺度の基礎統計量　学業場面における社会的比較 5 下位尺度，学業場面における継時的比較 2 下位尺度，社会的比較志向性尺度，継時的比較志向性尺度，自己効力感尺度の各 1 項目あたりの平均値を各下位尺度点として算出した。各尺度と下位尺度の平均値（*M*），標準偏差（*SD*），得点範囲（*R*），α 係数および英語のテスト成績の平均値，標準偏差と得点範囲を Table 3 に示す。

Table 3
各変数の平均値，標準偏差，得点範囲，α 係数

	M	*SD*	*R*	α
学業場面における社会的比較				
他者遂行比較	3.86	1.41	1-7	.87
他者思考比較	3.70	1.76	1-7	.93
他者方法比較	3.35	1.52	1-7	.82
他者失敗比較	3.39	1.66	1-7	.84
他者態度比較	3.42	1.80	1-7	.87
学業場面における継時的比較				
自己内学習比較	3.49	1.38	1-7	.93
自己内遂行比較	4.45	1.33	1-7	.80
社会的比較志向性	3.98	0.87	1-7	.75
継時的比較志向性	3.93	1.07	1-7	.82
自己効力感	3.35	1.29	1-7	.93
テスト成績	7.37	2.73	1-16	-

学業場面における社会的比較尺度と継時的比較尺度の構成概念妥当性　学業場面における社会的比較 5 下位尺度の構成概念妥当性を検討するため，学業場面における社会的比較と社会的比較志向性の相関係数を算出した。その結果，学業場面における社会的比較 5 下位尺度は，すべて社会的比較志向性と有意な正相関を示した（$r = .28$～ .45; いずれも $p < .001$）。これらの結果から学業場面における社会的比較 5 下位尺度は，一定の構成概念妥当性をもつものと考えられる。

また，学業場面における継時的比較 2 下位尺度の構成概念妥当性を検討するため，学業場面における継時的比較と継時的比較志向性の相関係数を算出した。その結果，学業場面における継時的比較 2 下位尺度は，どちらも継時的比較志向性と有意な正相関を示した（$r = .51, .46$; いずれも $p < .001$）。これらの結果から学業場面における継時的比較 2 下位尺度は，一定の構成概念妥当性をもつものと考えられる。

自己効力感や英語のテスト成績と学業場面における社会的比較や継時的比較との関連　まず自己効力感の中央値（3.44）よりも低い学生を自己効力感低群，中央値より高い学生を自己効力感高群

とした。学業場面における社会的比較5下位尺度と継時的比較2下位尺度をそれぞれ従属変数として，自己効力感の高群と低群を独立変数とする t 検定を行い，効果量 d を算出した（Table 4）。その結果，自己効力感の高群では低群よりも他者遂行比較（t（131）= 3.02, $p < .01$, $d = 0.52$），他者思考比較（t（131）= 2.98, $p < .01$, $d = 0.52$），他者態度比較（t（131）= 2.32, $p < .05$, $d = 0.40$）および自己内学習比較（t（131）= 2.21, $p < .05$, $d = 0.38$）が有意に多かった。効果量 d が .20 以上で効果量小（水本・竹内, 2008）であることから，有意差が見られなかった他者方法比較と自己内遂行比較についても，自己効力感の高群と低群に差があるといえよう。

Table 4
自己効力感高群と低群の学業場面における社会的比較，継時的比較の M，SD，t，d

	自己効力感低群（n = 69）		自己効力感高群（n = 64）			
	M	SD	M	SD	t	d
学業場面における社会的比較						
他者遂行比較	3.48	1.34	4.20	1.42	3.02 **	0.52
他者思考比較	3.24	1.60	4.14	1.88	2.98 **	0.52
他者方法比較	3.06	1.38	3.51	1.64	1.71	0.30
他者失敗比較	3.05	1.57	3.73	1.79	2.32 *	0.40
他者態度比較	2.91	1.68	3.93	1.87	3.30 **	0.57
学業場面における継時的比較						
自己内学習比較	3.21	1.33	3.74	1.45	2.21 *	0.38
自己内遂行比較	4.19	1.27	4.63	1.37	1.90	0.33

$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$.

次に，英語のテスト成績の中央値（7.00）よりも低い学生をテスト成績低群に，中央値より高い学生をテスト成績高群に分類した。学業場面における社会的比較5下位尺度と継時的比較2下位尺度をそれぞれ従属変数として，テスト成績の高群と低群を独立変数とする t 検定を行い，効果量 d を算出した（Table 5）。その結果，英語の学業場面において，テスト成績の高群では低群よりも他者遂行比較（t（112）= 2.91, $p < .01$, $d = 0.55$），他者思考比較（t（112）= 3.19, $p < .01$, $d = 0.61$），他者態度比較（t（112）= 3.53, $p < .001$, $d = 0.67$），自己内学習比較（t（112）= 2.30, $p < .05$, $d = 0.44$）および自己内遂行比較（t（112）= 2.26, $p < .05$, $d = 0.43$）が有意にを多かった。なお，効果量の大きさから判断すると，他者失敗比較においてもテスト成績の高群と低群の差はあるといえよう。これらの結果のから，英語のテスト成績の高群の大学生ほど，他者と学業成績，考え方，間違い方や勉強への姿勢を比較し，今の自分の勉強方法や成績について過去の自分と比較しやすいことが明らかとなった。

自己効力感および英語のテスト成績の高群は低群よりも，学業場面における社会的比較だけでなく継時的比較を多く行う傾向が示唆された。また，テスト成績の高群は低群よりも，他者遂行比較だけでなく，他者思考比較，他者態度比較などの能力や成績以外の側面でも社会的比較を有意に多く行うことが示された。

Table 5
テスト成績高群と低群の学業場面における社会的比較，継時的比較のM，SD，t，d

	英語力低群（n = 48）		英語力高群（n = 66）			
	M	SD	M	SD	t	d
学業場面における社会的比較						
他者遂行比較	3.53	1.46	4.23	1.13	2.91 **	0.55
他者思考比較	3.10	1.62	4.13	1.75	3.19 **	0.61
他者方法比較	3.20	1.49	3.39	1.49	0.65	0.12
他者失敗比較	3.02	1.67	3.58	1.61	1.79	0.34
他者態度比較	2.71	1.53	3.85	1.81	3.53 ***	0.67
学業場面における継時的比較						
自己内学習比較	3.13	1.21	3.71	1.40	2.30 *	0.44
自己内遂行比較	4.08	1.50	4.62	1.05	2.26 *	0.43

*p < .05, **p < .01, ***p < .001.

今後の課題　本研究の課題は以下の2点である。第1に，本研究で示された多様な社会的比較や継時的比較が，学業成績や動機づけなどの要因にどのような影響を及ぼすのか，その影響プロセスを解明することである。外山（2009）は，社会的比較をした後に生じる感情が対処行動に影響することを見出している。外山（2006a, b, 2009）では本研究の他者遂行比較に相当するテスト成績の比較をしているだけである。本研究で示された多様な社会的比較や継時的比較が，感情や対処行動にどのような影響を及ぼすのか体系的に検討していく必要がある。

第2に，継時的比較において過去と比較する際に，現在よりも良かった過去が比較対象となっているのか（下方比較），現在よりも悪かった過去が比較対象となっているのか（上方比較）について今後検討し，継時的比較の方向性について明らかにする必要がある。継時的比較では，比較対象となる過去がポジティブであったりネガティブであったりすることが示唆されている（並川, 2011）。実験的研究では，上方比較であるか下方比較であるかは過去との主観的な距離に影響を与えることが実証されている（Ross & Wilson, 2002）。学業場面における継時的比較においても，同様の影響プロセスがみられるかを検討する研究が必要である。

引用文献

Albert, S. (1977). Temporal comparison theory. *Psychological Review*, **84**, 485-503.

Ames, C. (1992). Classrooms: goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.

Blanton, H., Buunk, B. P., Gibbons, F. X., Kuyper, H. (1999). When better-than-others compare upward: Choice of comparison and comparative evaluation as independent predictors of academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 420-430.

Darnon, C., Dompnier, B., Gilliéron, O., & Butera, F. (2010). The interplay of mastery and performance

goals in social comparison: A multiple-goal perspective. *Journal of Educational Psychology*, **102**, 212-222.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.

Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.

Huguet, P., Dumas, F., Monteil, J. M., & Genestoux, N. (2001). Social comparison choices in the classroom: Further evidence for students' upward comparison tendency and its beneficial impact on performance. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 557-578.

吉川肇子・久保真人 (1991). 成功，失敗における比較対象の選択傾向の差異―社会的比較か継時的比較か？― 社会心理学研究, **6**, 148-154.

久保信子 (1999). 大学生の英語学習における動機づけモデルの検討―学習動機，認知的評価，学習行動およびパフォーマンスの関連― 教育心理学研究, **47**, 511-520.

水本 篤・竹内 理 (2008). 研究論文における効果量の報告のために―基礎的概念と注意点― 英語教育研究, **31**, 57-66.

森 陽子 (2004). 大学生の自己効力感と英語学習方略の関係 日本教育工学会論文誌, **28**, 45-48.

並川 努 (2011). 継時的比較の個人差―継時的比較志向性尺度の作成と検討― 心理学研究, **81**, 593-601.

Pintrich, P. R., & De Groot, E. V. (1990). Motivational and classroom academic performance. *Journal of Educational Psychology*, **82**, 33-40.

Ross, M., & Wilson, A. E. (2002). It feels like yesterday: Self-esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 792-803.

外山 美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連―社会的比較志向性尺度を作成して― 筑波心理学研究, **24**, 237-244.

外山 美樹 (2006a). 社会的比較によって生じる感情や行動の発達的変化―パーソナリティ特性との関連性に焦点を当てて― パーソナリティ研究, **15**, 1-12.

外山 美樹 (2006b). 中学生の学業成績の向上に関する研究―比較他者の遂行と学業コンピテンスの影響― 教育心理学研究, **54**, 55-62

外山 美樹 (2007). 中学生の学業成績の向上における社会的比較と学業コンピテンスの影響―遂行比較と学習比較― 教育心理学研究, **55**, 72 – 81.

外山 美樹 (2009). 社会的比較が学業成績に影響を及ぼす因果プロセスの検討―感情と行動を媒介にして― パーソナリティ研究, **17**, 168-181.